

## 法燈国師の母

元亨釈書・鷲峰開山法燈円明国師行実年譜・本朝高僧伝

元亨二(1322年)、虎関師鍊著の「元亨釈書」巻第六の

「浄禅三之一」の「鷲峯覚覺心」に次のようにある。

釋覺心。姓常澄氏。信州神林縣人。母祈<sub>二</sub>戸藏山佛<sub>一</sub>求<sub>レ</sub>子。  
一夕夢。佛以<sub>レ</sub>燈手授。覺有<sub>レ</sub>娠焉。少小無<sub>二</sub>塵累之操<sub>一</sub>。年  
十五投<sub>二</sub>神宮寺<sub>一</sub>讀<sub>二</sub>佛書<sub>一</sub>。十九薙染受<sub>二</sub>具于東大寺<sub>一</sub>。

「蔵」を「かくす」とも訓むこともできるので、「母祈<sub>二</sub>戸藏山佛<sub>一</sub>」とある「戸藏山」を後世戸隠山と解するところがある。「年十五投<sub>二</sub>神宮寺<sub>一</sub>讀<sub>二</sub>佛書<sub>一</sub>。」とある神宮寺の方は、「信州神林縣人」とあることから現在松本市浅間温泉にある神宮寺と推測されている。

次いで、覺心の法孫である自南聖薫による「鷲峰開山法

燈円明国師行実年譜」(1382?) (続群書類従二二七巻

九上)では「戸蔵」に代わって「戸隠」の表記が現れる。

師諱覺心。號心地。信州近部縣。又曰神林縣人。姓恒氏。又

曰常澄氏。母氏氏族失記。無子。祈求戸隠觀音靈像。一夕夢感。

大士親手然燈以授。覺而有妊。

この文書では「戸蔵」は「戸隠」となっている。こうしたことの結果であろうが、現在の戸隠神社奥社には、「法燈国師母公祈願觀音堂跡」なる史跡もある。

ただし、戸隠山顕光寺五十五代の別当である乗因は「戸隠山大権現縁起」で顯光寺の末寺である筑摩郡仁熊村とくらの富蔵山岩殿寺を戸蔵山と解している。乗因の理解によれば法燈国師は戸隠の末寺と関係があっても本寺とは関係がないことになる。

少なくとも女人禁制の戸隠奥院に母公が参詣するのは無理である。ただし、参詣したのではなく、「鷲峰開山法燈円明国師行実年譜」にいうように觀音の靈像に祈つたのであれば参詣して女人禁制を破るのではないから

辻棲はあう。

なお、永正十四（1517年）の奥書を持つ「紀州由良鷲  
峯山法燈円明国師之縁起」（和歌山県史 中世史料二所  
収）には次のようにある。

爰有一人老師、諱覺心、号心地、信州神林県人也、父常澄氏、  
然母祈子於戸隠観音、一夕夢大士手自燃以授、覺而有妊矣、  
譬如仏母摩耶夫人、夢懷白象誕生釈尊焉、人王八十三代土御  
門院御宇承元と年丁卯誕生、及生英氣逼人、稍長身意離俗矣、  
十五歳就于戸隠神宮院主習読、頗諳仏経儒書大意、

ここに「戸隠神宮院主」とあるが、「元亨釈書」の戸蔵  
山が戸隠山となり、さらに神宮寺が合体した結果であつ  
て、法燈国師が戸隠山で学んだ訳ではない。

また、元禄十五（1702年）成立の卍元師蛮著「本朝高  
僧伝」は次のようになっている。

釋ノ覺心號<sup>ス</sup>ニ心地<sup>ト</sup>一姓<sup>ハ</sup>常澄氏信州神林縣ノ人母禱<sup>テ</sup>ニ戸藏ノ  
觀音ノ像<sup>ニ</sup>一求<sup>ム</sup>レ子<sup>ヲ</sup>其ノ夜夢<sup>テ</sup>ニ大士持<sup>シテ</sup>レ燈<sup>ヲ</sup>授<sup>クト</sup>レ母覺<sup>テ</sup>而  
即娠<sup>ム</sup>

註 「元亨釈書」の当該箇所は近代デジタルライブラリ

―「国史大系 第一卷 百鍊抄 愚管抄 元亨釈  
書」374コマ目にある。DOI 000000866748

「本朝高僧伝」の当該箇所は国文学研究資料館の電  
子資料館に高知県立図書館蔵のもの画像がある。

522-533 コト目。DOI 10.20730/100064593